

住宅街の変貌に思う

早稲田大学名誉教授・すずしろ医療生協理事長 岡田浩平

私の住んでいる桜台地区は、本来閑静な住宅街でしたが、ここにきて激しい変わりようです。一戸建てだった所に集合住宅が次々と。3階建て、4階建て、はては住宅街のど真ん中に6階建てです。日照が遮られ、緑の樹木の居場所が皆無になっていきます。集合住宅の新住民と周辺住民との繋がりも持ちにくい状態。高齢化が進むなか、地域の交流や連帯が薄れていくのです。

とにかく、こんな建物の増殖は近隣住民をストレス一杯にするばかりです。商業地区でもない住宅街に、高さ20mもの建築が許されるなんて！行政は何時そんな規制緩和をしたのでしょうか？また、今問題となっている道路の建設計画も住宅街をぶち抜いて突っ切り、由緒あるお寺の敷地まで削って造るというのです。それに京都の由緒ある街並みの維持も怪しくなりつつある、そんなテレビ映像もありました。

こうした状況を前にするとき、ドイツの事例が思い浮かびます。ドイツの場合、街並みの美観維持にあたっては建築規制がとても厳しいのです。屋根の色はネズミ色かレンガ色に限られ、塀は生け垣か、視線の通る短冊状のもの。地上30センチ以上の高さになるとブロックやコンクリートの塀は駄目。ウィーンの場合でも、隣との境界は生け垣となっていました。

また、ドイツの各都市には、街づくり担当の文化局長というのがいます。公募によって選抜採用される専門家です。各都市にはこうした都市計画の有能な人材がいて、アイデアを競い合って、住みよい街、魅力的な町づくりに努めています。たとえばデュッセルドルフ市の場合、街の中心部では自動車道路を地下化し、ライン河沿いにプロムナードを造り、長さ80mのカウンターのカウンターの川岸バーまで設けました。ラインの流れを目の前にしながらビールが飲めるという趣向です。また、フランクフルトでは、いろいろな博物館を造って「博物館列島」とまで云われる一帯を造り、昨秋には、第二次世界大戦で徹底的な破壊にあった旧市街を昔の姿のまま復元しました。これが話題を呼び、観光客を惹きつけています。こうした動きを見ていると、経済優先で活性化を図るのでなく、「文化が金を生む」という発想が基本にあって、上手く機能しているように思います。

それに対して、日本の場合、都や区の行政の場合、都市計画の担当者は、普通行政職員の中から選ばれているのがほとんどでしょう。これでは、役人の発想しか生まれられないように思われます。斬新な都市計画のプランはおろか、街並みの景観、住む人たちが気分よく暮らせる住環境の維持確保など、住民の方を向いた感覚が薄いか、欠けているように思われてなりません。